

## 議事録（要旨）

会 議	第3回子ども読書活動推進計画策定委員会
開 催 日 時	令和2年9月30日（水）17:30～19:30
開 催 場 所	中央図書館3階視聴覚ホール
出 席 者	委員長 張替恵子      委員 赤羽幸子      委員 岩本恵真      委員 鈴木佳苗 委員 庭井史絵      委員 萩原敦子      委員 三原 忍      委員 若槻義隆 委員 勝又隆二      委員 福島文昭
事 務 局 出 席 者	図書館長 目澤弘康 統括指導主事 小澤泰斗 中央図書館 前田奈緒子      中央図書館 後藤千春 中央図書館 飯田香代子
配 布 資 料	次第 資料1 第2回武蔵野市子ども読書活動推進計画策定委員会 議事要録（案） 資料2 第3回子ども読書活動推進計画策定委員会検討資料 ～市立図書館の取組と今後の課題について～ 資料3-1 第2次武蔵野市子ども読書活動推進計画の基本理念等（案） 資料3-2 本計画の基本理念、「読書」のとらえ方、基本的な考え方について 追加資料 0123施設 図書管理・読書推進について
議 事	<p>（1） 第2回議事要録（案）の確認について</p> <p>【事務局】（資料1） 事前にいただいた修正やご意見等反映した資料を配布している。確認いただき、承認の後、ホームページにて公開する。</p> <p>（2） 市立図書館の取組と今後の課題について</p> <p>【事務局】（資料2の説明）</p> <p>&lt;委員との質疑回答&gt;</p> <p>【委員長】引き続き、0123はらっぱ園長の萩原委員よりお話いただきたい。</p> <p>【委員】0123は「吉祥寺」と「はらっぱ」の2ヵ所あり、0～3歳向けの親子を対象とした自由来所型の子育ての広場である。両館ともに2階建てで、親子で自由に過ごしてもらおう建物となっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「吉祥寺」では2階に本が設置してあり、ゆっくり楽しんでもらえるようにソファを設置したり、壁面にタペストリーを飾ったり、絵本と連動しながら静かに遊ぶコーナーを設定している。</li> <li>・「はらっぱ」は1階がすべて遊び場になっており、その一角に図書スペースを配置している。</li> <li>・両館ともに蔵書数は約3,400冊である。オープン時に選書に関わった園長が子どもの絵本が専門だったので、ベーシックな絵本は取り揃えてある。50音別に収納してあり、子どもたちが取りやすいように配置している。季節ごとのテーマや、年齢別に推薦図書を設置している。ひろばで行っている読書活動は自由参加型である。</li> <li>・「吉祥寺」の「おはなしタイム」は、ボランティアの方が月2～3回絵本の読み聞かせを行っており、平均12、3組の親子が集まる。「はらっぱ」では、秋に「おはなし3days」として、市報で呼びかけて集まってくださった読み聞かせボランティアの方が絵本や紙芝居、パネルシアターを行っている。</li> <li>・「ひろばイベント」や「絵本の歌い聞かせ」は、武蔵野市内で活動している音楽関係の方などがボランティアで行っている。「講師を招いての講座」は、母親</li> </ul>

向けの講演会等の中で年1回ずつ絵本に関する講座を開催しているもので、40～50人の参加がある。

・0123では、年1回アンケート（市で行うモニタリング調査）を取っており、その要望の中に、絵本のことが時々出てくる。「貸し出ししてほしい」という意見が毎年必ずみられる。その他に「移動図書館が0123にも来てほしい」「0123に図書館の返却ポストを設置してほしい」「リクエストした作家の著書を入れてほしい」といった意見がある。

・0123で普段お母さんから質問されることとしては、「どの絵本を選んでよいかわからない」「子どもが同じ本ばかり読みたがる」「読んでいる途中でどこかへ行ってしまう」「図鑑のようなものばかり見たがる」「寝る前の読み聞かせがよいというが、永遠に読まされ、一向に寝ようとしなない」などがある。

・以前、子どもが赤ちゃんの頃は武蔵野プレイスによく行っていたが、動き始めるとお母さんは本が読めない、子どもが何をするかわからないから行かなくなってしまうという話を聞いたことがある。

【委員長】以上の説明を踏まえて、質問・意見をいただきたい。

【委員】保護者に対する働きかけの充実、ボランティアなど担い手の育成などは、「第一次子ども読書活動推進計画」でも挙げられた課題であり、いまだ解決できていないということと認識している。

一方で、この期間、待機児童解消のため保育園は増え、現在、保育園、幼稚園、子育て支援施設を含めると50施設を超える。施設規模も大小あり、図書コーナーの規模や蔵書数も施設によって差がある。これらの異なる環境にある各施設に対して、例えば「支援」であれば、図書館から施設に出向いて支援するのか、保育士や幼稚園教諭など施設の職員を支援して保護者や子どもに還元するか。一つひとつを支援するとなると図書館の負担も大きくなる。いろいろな方法があるが、どこまで具体的に書けるかはあるものの、計画の中にある程度は明確に書いていくことが必要だろう。

【委員長】50以上ある施設の中で、読書環境にばらつきがあるか。

【委員】幼稚園は教育施設なので、読書コーナーを設置しているところもある。保育園はその限りではなく、また、施設によって、蔵書数も数十冊から数千冊までばらつきがあり、それぞれ支援の仕方が違うと思われる。

【委員長】日野市では、学校と同じように幼稚園にも団体貸出を行っている。そういう団体貸出や施設訪問等は行っているのか。

【事務局】図書館側から幼稚園・保育園への働きかけは、何かで呼ばれて単発で読み聞かせをする等はたまにあるが、日常的に出向いてお話を会をする等はやっていない。近隣の保育園が散歩の途中で図書館に寄って本を借りて行く姿はよく見かける。

【委員長】課題の中に「先生が個人カードを使っていた」と挙げられているが、これはたまたまその園が団体登録をしていなかったということか。

【事務局】市立図書館のシステム上、幼稚園や保育園の「園カード」を作ることが難しく、先生方がご自分の個人の図書カードで借りているのが現状である。園が借りている本の分析も進めたいが、個人のカードだと返却すると履歴が消えてしまうため、ニーズの把握ができない。近々、システムの入替があるので、それに合わせて実現できればと考えている。

園カードができれば、2週間ではなくもう少し長期に、園として多くの冊数を借りることができる。それに合わせて、幼稚園・保育園に出向いて話を会をする等もできればよいと考えている。ただ、50園もあると図書館員だけでは難しいので、ボランティアの養成なども必要かと考えている。

【委員長】図書館の専門員でない保育の先生方が、図書の管理までしなければならぬとなると大変なことだ。貸してほしいという希望があるとのことだったが、図書館で団体貸出しした本を「また貸しする」ということもあるのか。

【事務局】園の先生が図書館に選びに来られた本を配送する「団体貸出」は今

も行っている。しかし、団体登録している園はあまりない。散歩の途中に気軽に借りていく方がおそらく多いので、その実態に合わせて「園カード」を可能としたいと考えている。

やはり、幼稚園や保育園の先生方はお忙しいので、今回の計画においては、市立図書館からの働きかけや支援について書いていく方が現実的と考えている。

【委員長】乳幼児は読書の土台ができる時期で、親の関心も高いので、そこは手厚くできるとよい。

【委員】0123はとても楽しそうで、子どもが小さいときに連れて行けばよかったと思った。

【委員長】東京こども図書館で、「本をよんで・よんでもらってうれしいさん」という、乳幼児がいる家庭に向けたパンフレットを作成した。子どもの成長に応じた本の紹介とともに「わらべうた」を扱っている。子どもが本に親しむ前の段階として、親子で歌い遊ぶ「わらべうた」が言葉を育む伝統文化財として認められてきており、ここ数十年、保育現場でも学びが活発になっている。そんなに急いで本を読ませなくても、本は2、3歳になって言葉の土台が本格的にできてから楽しめばよいという視点で、わらべうたというキーワードを盛り込んでほしい。

【委員】夫が子どもの頃に読んでいた絵本が30冊くらいあり、子どももそれらの本が大好きだった。時代が変わっても基本の絵本はかわらないと感じ、保育園の支援として、こういった基本の絵本を扱うということもあるのではと思った。

【委員長】大人の読書と子どもとの最も大きな違いは、時代を超えて子どもを引き付ける魅力ある一群の本があることである。子どもは古い本でも今の新しい冒険として楽しむ。我々も読み聞かせの定番として紹介しているが、手に入りやすい本で300冊くらいある。これらの本が、どこの施設でもまず蔵書の核としてあるとよい。

【委員】新しい保育園は、小規模なものが多いように思う。本を置きたいがスペースがないといったお話を聞いたことがある。これらの園に学童クラブのような団体貸出ができれば、ニーズはあるのではないか。

【委員】教育施設である幼稚園とは異なり、小規模の保育施設ではスペースの関係で蔵書に限りがあり、課題である。

【委員長】本を置くスペースが限られているならなおさら、まずは読み継がれている本をおいておくことで、子どもが本を好きになる確率は高くなると思われる。

【委員】共働きが増え、小さい頃の読み聞かせが難しい家庭も多くなっている。その意味でも幼稚園・保育園の果たす役割はとても大きい。これらの園に市立図書館から本を一時的に貸すことで、子ども達が絵本に触れる機会を増やすのはどうか。小さい時の環境や経験はとても大きい。借りに来るのを待っているだけでなく、市立図書館の方から持って行ってあげるといったシステムを作っていくとよい方向に行くのではないかと思った。

【委員】例えば0123の本を紹介するといったことは難しいのか。

【委員】今までそういう経験をしたことはない。読書に限らず、いま、子育て支援ではアウトリーチが重要と言われている。スタッフが出向いて各コミュニティセンターなどでの読み聞かせ活動などはしているが、お話しは今のところやっておらず、いろいろな形のアウトリーチを考えていけないと思っている。

先進事例の資料を見て、無料の託児サービスをしている図書館事例に驚いた。お母さん向けに読書の時間を確保するという事なのか。こういう時代がきて少しびっくりしている。0123でも、子どもを15分でもいいから預かってほしい、その間に幼稚園の資料が読みたい、といった声もある。やったほうがよいというわけではないが、図書館にきてもらうサービスの一つの形ではあるかと思った。

【委員長】いま、市立図書館のブックリストの制作や更新頻度はどうなっている

か。

【事務局】ブックスタート向けに0、1、2、3歳児用と3、4、5歳児用と2種類あり、隔年で少しずつ更新している。児童担当者が選んで会議で精査した上で作成し、昔から読み継がれている本と新しいものとの両方をいれるようにしている。小中学生向けのブックリスト「ブックマーク」や「しおりちゃん」は、児童担当者が自分で本を読んできて紹介する担当者会議を毎月開催し、紹介する本を選んでいる。

【委員】幼稚園・保育園と連携する際には、図書館が中心的に動くとしても、先方の園の担当者が確実に決まっていなくて難しい。担当者と定期的に連携がとれることが重要と思う。

【委員長】各園の読書担当というのは、兼務だとは思いますが、50園すべてというのは難しい面はないか。

【委員】確かに難しいと思うが、そこがしっかりできていないと、市立図書館からいくら働きかけてもうまくいかないと思われる。

【委員】資料にも書かれている「特別支援学級との連携」はとても重要と思う。加えて、普通学級にいるが読むことに困難を持っている児童も一定数いると言われており、先生方もその支援に苦慮されている。そのため、対象を特別支援学級と絞るのではなく、読むことが困難な子どもたちに向けた資料の提供とともに、こういった症状にはこういったサポートがあればよいのか、といった専門知識を研修することも考えられる。

また、現在、市立図書館のホームページには、子ども向けページはあるがYA向けページはない。中高生にとってウェブは当たり前なので、情報発信につながる窓口がないのは致命的である。そういった整備が急務ではないかと思った。

【事務局】1月にシステム更新する際にYA向けのホームページを開設予定で、作成中である。

【委員】理想としては、システムがかわるタイミングで、小中の図書館と市立図書館が横断検索できる仕組みをホームページに盛り込み、かつ、教科書、指導要領、調べ学習に関係あるようなリンク集があり、ポータルサイトのようになっていれば、物理的に図書館に来る中高生が少なくても、図書館をリソースとして使う中高生は増える。本を読む、図書館に来てもらう等ではないつながり方がまだまだある。

【委員長】先進事例の資料を見ると、公共図書館と学校図書館が横断的に連携している事例が多くみられる。

【委員】熊本市では、新型コロナで休校になった際に、学校図書館のカードで公共図書館の電子書籍を借りられるシステムをつくったところ、電子図書館の利用が10倍になった。そのすべてが小中高生による利用かどうかはわからないが、彼らにとっては、実際に行かないと利用できないのはハードルが高い。行かなくても利用でき、触れられる仕組みが大事だと思う。

【委員長】方向性として将来的に目指したいことは、計画に盛り込むとよい。

【委員】電子図書館は魅力である。中学生はわざわざ借りに行かない。図書館を使う理由を聞いたら、一番はテスト前に勉強に行きたいというものだった。今はKindleでも本が購入できる。お金の節約の点でも、電子図書館は魅力だと思う。

【委員長】他になければ、次の議題へ移る。資料説明をお願いしたい。

### (3) 本計画の基本的な考え方について

【事務局】(資料3-1、3-2説明)

【委員長】「読書の捉え方」について、楽しみとしての読書と、実用的・学習としての読書の2つがあるということは客観的にも言われているので、おさえておいていい箇所だと思う。

また、媒体として紙とデジタルについて今回の計画でどのように扱うか、この場で共有しておくといよい。

マンガについては、図書館の蔵書にはあるが計画の中では主体にはならない、述べないということかと思う。

【事務局】中高生の読書の入り口としてのマンガについて書くことは考えているが、あくまで読書につなぐためのステップとして位置づけている。

【委員長】マンガについて中核では触れないということによいか。

脳神経学者の方が書いた『デジタルで読む脳 紙の本で読む脳』という本に、デジタル画面と紙で読むときではそれぞれ脳の違う領域を使う、幼い時からデジタルばかりで読んでみると大意をつかまずに読み飛ばす・映像的にとらえて画面処理するといった脳の使い方をするので、理屈でとらえて深い読みをする脳の使い方がなかなか育たない、両方を育ててはいけませんが3歳まではデジタル利用を制限する方がよい、と述べられている。「読書の捉え方」はデジタルを含める方向性となっているが、図書館も教育現場も読み手の成長過程を気にしながら扱っていくことが必要、という点も盛り込んだ方がよい。

【委員】ネット上の情報を参照する際、断片で答えが出てしまって、それが全体の中でどういう要素か理解していないことがある。全体をいかに見せるかをやっていけないといけない。目次など、全体を見渡せる部分はいろいろとある。断片ということに気づかないのは憂慮すべきことだ。

【委員】特性に応じた利用の仕方という意味で、電子媒体は本ほどの長い歴史を持っていないので、教え方を含めて課題がある。ただ、それを脳の話として理念、指針に盛り込むのは危険ではないか。科学的な積み重ねがあるのかは多少疑問がある。

【委員長】研究の途上にあるので断言はできないが、ただ、注意はしておかないといけないし、計画の中でも少し言及した方がよい。紙の本はゆっくりとした時間の中で深く読むことを促すメディアである。今の子どもたちには面倒くさいと思いがちだが、これをいかに身近なものにしていくかが重要である。

【委員】これからは学校現場にデジタルがどんどん入ってくるので、子どもたちの情報活用能力を育成していくことは大事だと思っているが、インターネット上の情報入手も読書として計画に盛り込むとすると、情報活用能力の育成、メディアリテラシースキルということも対象とするのかどうか。例えば、市立図書館に調べものコーナーがあると、子どもたちが深く知っていく、知的好奇心を満足させることに関わっていく気もする。学校現場としても、これから何をどうやって身につけさせていくか、活用していくか考えていかななくてはならない。

【委員】「読書の捉え方」にある「書籍のみならず図鑑や事典などに加えて、電子書籍やインターネット上からの情報入手も含むものとする」の「書籍のみならず」はどこへかかるのか。表現として工夫が必要である。「情報入手」だと検索等含むので「インターネット上からの情報入手」ではなく「電子書籍やインターネット上の情報を読むことも含む」ではどうか。読む対象が印刷された物語だけではないということが伝わればよい。

【委員長】「文学（物語・小説）」も同次元ではないと思うので、「文学（物語・絵本）」としてもいいのでは。もしくは「文学」でよいかと思う。

【委員】「情報を入手する」の箇所、2行目にも「情報を入手する」と出てきているが、同じ意味で使っているか。

【事務局】ご指摘のように、物語・小説にも「入手」と使っているので、言葉を整理したい。

【委員長】1行目の「当然のこと」は偉そうに感じる。

【委員】「書籍のみならず図鑑や事典などに加えて」とあるが、「生き生きとした知的好奇心を満たす等のために図鑑や事典などをみる」としてはどうか。前半が中身、後半がメディアと分けると、中身もメディアもひろげる2つの文章になる。

【委員長】「基本的な考え方」は、明快でよいと思った。

【委員】前回の計画では「目的→基本理念→基本方針」という構成だった。今回の「基本的な考え方」というのは前回でいう「基本方針」にあたるものか。

【事務局】前回の計画の構成は複雑かと考え、整理し直した。ご指摘の通り、「基本的な考え方」が前回の「基本方針」にあたる。

【委員長】そうすると2章の全体のタイトルはどうか。

【事務局】2章のタイトルは未定である。

【委員】途中で「基本的な考え方」が出てくるよりも、前回の計画の構成の方が、基本的な考え方の中に目的、基本理念、基本方針があって読みやすい。前回と同じではどうか。

【委員】今の内容を見ると、「基本方針」とする方がふさわしいと思う。

【事務局】ご意見を踏まえて、文言を整理したい。

【委員長】どうしてもという変更でないのなら、前回と同様の構成にして、中身が変わったとする方が読みやすい。

【委員】3には、人材の「育成」だけでなく、「配置」など人員を充実させられるような文言もあるとよい。この点は連携とも関わってくる。司書がいない問題もある。いくらい取組があってもやる人がいないと実現できない。

【委員長】前回も、学校図書館サポーターの方について話が出ていた。

【事務局】資料3-1に「学校図書館サポーター制度の拡充」という取組がある。育成だけではないという視点を盛り込めるように検討したい。

【委員】資料3-2の3ページ最終行に「支援体制を強化していきます」と書いてあり、ここに含むと考えることもできると思う。

【委員】三本柱というと並列に見えるが、読書環境の定義にはよるが、1が何でも吸収しそうな概念で、1を達成するために2や3という関係性にあるのではないか。1、2、3が並列というのであれば、読書環境を狭めて定義する必要があるかもしれない。

【事務局】確かに1が包括的な文言となっているので、再度整理したい。

【委員】1には2や3が含まれるので、表現を再度検討いただきたい。

【委員】この三本を進めていくと、読書環境整備につながることはわかる。

【委員長】1は「発達段階に応じた」ということに留意して表現しているのではないか。

【委員】「環境の整備」だと包括的である。

【委員長】次回は素案作成に入っていくとうことでよろしいか。

【事務局】次回は、本日いただいたご意見を踏まえて中間まとめとして、取組、目次等、骨格も含めてご用意したい。

【委員長】今日予定された議事はこれで終了としたい。

## 2 その他

### (1) 日程調整

【事務局】

＊日程調整

第4回 11月17日（火）16時半よりプレイス見学会（希望者のみ）

17時半より会議 3階スペースCにて

第5回 12月14日（月）17時半より 中央図書館2階

【委員長】以上で第3回子ども読書活動推進計画策定委員会を閉会する。

(以上)